

「イエスによってつくられた」と語ることは妥当か

佐藤 真基子

一

このたび加藤信朗先生に質問させていただいたのは、次の二点である。

①先生は、『告白』第一巻において、『創世記』冒頭と『ヨハネ福音書』冒頭が重ねられていることに注目し、次のように述べられた。

「人間」として人間の間に住んだ「イエス」(「ことば」である「神」)によって、「世のはじめから「世の終わり」に至るまでの「すべてのことが作られている」という「信仰の内に生きること」が、(中略)「永

遠と時間」の関わりという「謎」を解く「鍵」になる。

(一)発表稿八頁

たしかにアウグスティヌスは本巻で、『創世記』冒頭の一文「はじめに神は天と地をつくった」を解釈するとき、その創造は「ことば」においてであり(五・七)、それは「永遠のことは(aeternum verbum tuum)」(六・八、九)、「永遠の理法(aeterna ratio)」、「永遠の真理(aeterna veritas)」(八・一〇)、「知恵(sapientia)」、「はじめ(principium)」(九・一一)であり、それによって万物がつけられたのであると語る。アウグスティヌスが『ヨハネ福音書』冒頭を念頭において解釈していることは確かである。

しかし、アウグステイヌスは一度も、「イエスによってつくられた」とは語らない。第一二巻に引き続き『創世記』冒頭部分の解釈を展開する第二二、二三巻においても、「イエスによってつくられた」という表現は皆無である。しかも、第一二巻に先立つ第一〇巻では、「(キリストは)人間である限りでは仲介者 (mediator) であるが、ことばである限りでは中間の者 (medius) ではない」(四三・六八)と述べている。このことから、アウグステイヌスは「万物がことばによってつくられた」ことと、「万物はイエスによってつくられた」ことを区別していると考えられる。アウグステイヌスにおいて、「イエスによってつくられた」という表現が無いにも拘らず、加藤先生がアウグステイヌスの思想を示すものとしてその表現を選ばれたのは何故か。

②先生は、第一二巻の終盤、二九章三九節の長い一文に注目し、これは『告白録』全巻の冒頭から、おそらく、末尾に至るまでの全展開を見晴るかさせる一文である」と述べられた。先生は、この一文においてアウグステイヌスが「魂の運動」に関する語彙を多用していることから、「『内面性』という次元に思弁が引き込まれていっている」

ことを読み取り、さらにそれら「魂の運動」に関する語彙が、例えば「わたしの魂のはらわた (viscera animae meae)」といった、ある種の身体性と結びつけられていることを指摘なさった(ご発表稿一八一―一九頁)。では、その場合、「前にあるものに向かつて、(そのものへと) 伸び広げられることよって」と先生が訳された、“in ea quae ante sunt extensus”という言明において、「前にある」とはいかなる意味で「前にある」のか、そして「伸び広げられる」とは具体的にいかなる事態を指していると解釈されるのか。

二

研究会当日、この二つの質問に対して加藤先生は一貫して、「イエスによってつくられた」という表現はアウグステイヌスの思想を解釈する上で妥当であり、アウグステイヌスが人間の「内面性」に見出している「なんらか身体化される部分」においてこそ、時間的存在者である人間がイエスと一致して、「永遠の今」を生きる場があることを主張なさった。この先生のお答えを踏まえて、①、②の問いを再考することにしよう。

どのように解釈するならば、「万物はことばによってつくられた」ことと、「万物はイエスによってつくられた」ことは、加藤先生がなさったように言い換え可能であろうか。先に指摘したように、『告白』第一〇巻でアウグステイヌスは、「ことば」である限りの神と受肉した神を区別している。しかし、「ことば」も「イエス」も神である点で共通している。『イエス』（＝「ことば」である「神」）によってつくられた」と語る加藤先生は、神である点で両者が共通しているゆえ、言い換え可能とみなしているのだろうか。

しかし問題が残る。加藤先生は、「イエスによって（万物が）つくられた」ことは、「キリスト教の信仰」の内容であると言う（ご発表稿八頁）。たしかに、「ことばが受肉した」ことは「信仰の内容」であると言えよう。しかし、「ことばによってつくられた」ことはどうだろうか。アウグステイヌスは『告白』第七巻で、『ヨハネ福音書』第一章の多くの箇所と同じ内容を新プラトン主義の書物の中に見出したと述べている。『ヨハネ福音書』第一章三節「万物はことばによってつくられた」も新プラトン主義の書物と同じ内容を見出した箇所の一つとして挙げており、アウ

グステイヌスが、「ことばによってつくられた」ことを必ずしも「キリスト教の信仰の内容」とみなしていないことが分かる。このことに基づくならば、「イエスによってつくられた」ことは信仰の内容であると言うことは正しくない。

それでも尚、「イエスによってつくられた」という表現を用いて、それを信仰の内容とみなす加藤先生の意図はどこにあるのか。われわれは、先述のように加藤先生が、『告白』第一二巻二九章三九節の長い一文に、自らの内面にイエスと一致する場を見出すアウグステイヌスの思想を読み取り、それを『告白』全体を「見晴るかさせる一文」と位置づけていることに注目すべきであろう。アウグステイヌスの『創世記』解釈の内に、彼の受肉論を読み取る加藤先生は、次のように解釈しているのではないか。すなわち、『告白』第一二巻において、延いては『告白』全体において、アウグステイヌスは、キリストが万物創造の原理であることと、キリストが受肉したことを密接に関係づけている。この密接な関係に注意を喚起するためには、「ことばによって万物がつけられ、そのことばは受肉した」とを約めた、「イエスによってつくられた」という表現が

有益である。そして、この表現が指し示す全体を認めることは、受肉への信仰を含んでいる。それゆえ、「イエスによってつくられた」ことは信仰の内容であると言える。

三

では、この解釈が妥当であるかを検討しよう。「ことば」が万物創造の原理であることと、「ことば」が受肉したことは、アウグスティヌスにおいてどのように関係づけられているのか。『八三問題集』第六三問でアウグスティヌスは、『ヨハネ福音書』における「ことば(ロゴス)」について、次のように論じている。

ギリシア語「ロゴス」は、ラテン語の「理法 (ratio)」も「言葉 (verbum)」も意味するものであるが、しかしここ(「ヨハネ福音書」第一章一節)では、「言葉」と訳されるほうがよい。「言葉」と訳されれば、父なる方への関係が指し示されるばかりでなく、その言葉によってつくられたものにはたらく効力が指し示される。対して「理法」は、理法によって何も生じない

としても、正しく「理法」と言われうる。

アウグスティヌスは、「ロゴス」には、「理法」と訳された場合には生じない、「言葉」と訳されてはじめて指し示されることがあると指摘している。それが、「父なる方への関係 (ad patrem respectus)」と「言葉によってつくられたものにはたらく効力 (ad illa quae per verbum facta sunt operativa potentia)」である。

「父なる方への関係が指し示される」とは、いかなることであるか。「指し示す (significare)」という表現に注目しよう。『八三問題集』とほぼ同じ時期に執筆された『教師論』によれば、「指し示す」ことは言葉の本性的はたらきであり(二・二三)、言葉が指し示すのは、語り手の意図である。この考えに基づくならば、『ヨハネ福音書』冒頭の「ことば」は父なる神の言葉であるからには、それは父なる神の意図を指し示しており、「父なる方への関係が指し示される」とは、「ことば」によって、父なる神の意図が指し示されることであると解釈される。

では、「言葉によってつくられたものにはたらく効力」とは何であるか。『教師論』でアウグスティヌスは、

「イエスによってつくられた」と語ることは妥当か

言葉は語り手の意図を「指し示す」のであって、語り手の意図そのものを聞き手に与えることはできないと論じている(一一・三六)。しかるに人間の言葉において、「言葉によってつくられたもの」とは言葉によって指し示されたこととがらであり、聞き手が受け取った内容である。それは、語り手の意図に似たものであるとしても、そのものではない。しかし、似ているという点で、語り手の意図そのものへの志向性をもっている。

神のことばについても、同様の仕方で解釈される。すなわち、神のことばによってつくられたものとは、『ヨハネ福音書』によれば被造物である。被造物は、神のことばによってつくられたのであるから神の意図の写しであって、神の意図への志向性をもっている。この志向性は、被造物が自発的に獲得したものではなく、創造者につくられたことによつて被造物に生じたものであって、創造者の効力がそこに及んでいる。このように、言葉によつてつくられたものに見出される、語り手(創造者)への志向性が、「言葉によつてつくられたもの」にまではたらく効力である。

かくして、「ロゴス」が「言葉」と訳されることによつて(聖書読者に)指し示されるのがよいと言われているの

は、「ことば」が神の意図を指し示していることと、被造物が、神への志向性をもっていることである。なぜそれらが示されるのがよいかについて、アウグスティヌスは直接語っていないが、言葉を、指し示すことによつて人に知の獲得を促すものとして位置づける『教師論』の議論を念頭におくならば、神のことばや被造物が神の意図を人々に指し示すことは、人が神の意図を知るよう促されることを意味すると考えられる。この、時間的なものを通して永遠なるものを知るよう促す教育的力に、「ロゴス」を「言葉」と訳したほうがよい利点を見出していると推測される。

四

『告白』第一一巻八章一〇節においても、『八三問題集』同様、『教師論』の言語論に基づいて万物の創造を論じる議論が提示されている。万物の存在を規定する「理法」が「言葉」でもあることを説明した上で、アウグスティヌスは次のように述べている。

そのように、言葉は福音書において肉を通して語る。

この言葉が外部にあって人間の耳に響くのは、それが信じられて内部で探求され、永遠の真理において見出されるためである。その永遠の真理において、全ての生徒を善き唯一の教師が教える。この永遠の真理において、主よ、わたしはあなたの声を聞く。「我々に教える者は我々に語るが、我々に教えない者は、たとえ語るとしても、我々に語っているのではない」と私に言うあなたの声を聞く。

「そのように」とは、「ヨハネ福音書」八章二五節の、「私は始めにあなたがたに語りもした」というイエスの発言を指している。神の言葉がイエスを通して外に響く音声となり、人がそれを受け取るが、人はただちにその言葉から意味を受け取るのではない。語られたことを信じ、その指し示すところを探求し、知に至るのは自らの内にある真理においてであるとアウグスティヌスは言う。この説明は、教えるのは学び手の内なる真理、キリストであると論じる『教師論』の議論と一致している。「語る目的は教えることである」という『教師論』冒頭部の見解が、『告白』では神の言葉について適用されているのである。

以上のことから、「ことば」によって万物がつけられたことと、「ことば」が受肉したこと、そしてそれを信仰することが、アウグスティヌスにおいてどのように関係づけられているかが分かる。それはちょうど、教師が語った言葉を通して教師の意図を生徒が知ろうとする時のように、時間的なものが永遠的なものへの導き手であることを人が信じて、その志向する対象を知ろうとする、いわば「教えと学び」の関係で捉えられているのである。アウグスティヌスはしばしば、人間に内在する神の「ことば」である「真理」について、それを学び手にとっての「相談者」と呼び、「目の前に座す (praesidens)」と形容する (Cf. 『告白』第一〇巻二六章三七節、『教師論』一一章三八節)。この形容は、『告白』第一一卷二九章三九節の “in ea quae ante sunt extensus” で、人間の志向するべき方向が「前 (ante)」と表現されていることと一致している。とすれば、この言明において「前」へ「伸び広げられる (extensus)」とは、知を志向する、まさに「信仰」の営みであると解釈できよう。

かくして、次のように結論されよう。アウグスティヌスには無い「イエスによってつけられた」という表現に

よって、『告白』第一巻における創造論と受肉論の密接な関係を明示し、「イエスによってつくられた」ことへの「信仰」が、「『永遠と時間』の関わりという『謎』を解く『鍵』」(『発表稿八頁』)として位置づけられると論じる加藤先生の解釈は、アウグスティヌス自身の表現を超えながらも、たしかにその思想の本質を提示している。